

2. 「やわらかいスポーツ」の特質について

唐 木 國 彦

スポーツ史、スポーツ社会学、体育学原理論の研究分野において、「ニュースポーツ」などの新たなスポーツ現象が研究テーマになってきたのは、ようやく1980年代半ばのことである。そこでは「ニュースポーツ」などを、たんなる風俗論、流行論としてではなく、近代スポーツの新たな発展段階の問題として論じてきている。

小稿では、そうした「ニュースポーツ」論をめぐる議論を検討し、新たなスポーツ現象について文化変容の視点から筆者なりの整理を試みることにしたい。

1. 最近の論調

わが国において「ニュースポーツ」論に火をつけたのはスポーツ史の分野であった。1993年、スポーツ史学会の中堅がニュースポーツ研究会を組織し『ニュースポーツとは何か——そのスポーツ史的考察——』を発表する。野々宮徹はその総説論文において「ニュースポーツ」の生成の手法からつぎのように分類している。（同書12ページ）

①創造・開発・開拓・拡大によるもの＝「これまでにないスポーツ体験の場を作り出す（創造・開発）ことや、マリン・スポーツ、スカイ・スポーツ、マウンテンスポーツ等、新しいスポーツ分野の開拓や機器の性能向上により、機能的にも空間的にもその拡大をはかることがめざされた結果生み出されるもの」

②コラージュ（張り合わせ）によるもの＝「ジャギー（ジャズとジムナスティック）やエアロビック・ダンス、トライアスロン（水泳と自転車競技とマラソン）などに見られるように、それまでに存在している種目を組み合わせて（張り合わせて）新しい競技種目を作り出す方法から、バウンドテニス（テニスと卓球の要素の組み合わせ）やディスクゴルフ（ディスク投げとゴルフ・ルールの組み合わせ）、リングテニス（バレーボールの

ゲームとテニスの要素の組み合わせ）など、ルール状、形式上の各種の要素をたくみに組み合わせ」たもの。

③ダウンサイジング（軽薄短小化）によるもの＝「軽スポーツ、ミニ・スポーツなどに代表されるように、ルールの簡易化、活動空間や用具等を小さくしたり軽量化したりすること等々、いわば競技スポーツのよい意味での軽薄短小化によって生み出されたもの。

なお、「民族スポーツや、ニューゲームズ、コーペレイティブ・スポーツなども、他の民族に受け入れられるような工夫がなされていることや、平等主義、共同的等の対応も、広義のダウンサイジングに含めて考える」とされている。

野々宮は、今日こうした新たなスポーツ種目が生まれてきた動因として「時代的ニーズや個々人のニーズ」があることを指摘し、「今日のニュースポーツは、完成した近代スポーツという一般的法則を、いかに多様な目的と個性を有する個々人に適用させることができるかを求めていく過程で登場している」（同上、14ページ）とのべている。

この野々宮の分類は、さまざまな新種目が既存の近代スポーツのパリエーションとみている点で文化変容論のひとつであるといえることができる。そして、変容の方向として「多様な目的と個性を有する個々人に適用」をあげるが、そのことがわが国におけるスポーツの大衆化現象といかなる時代的関連があるかは十分に分析されていない。

稲垣浩もまた、同書で「ニュースポーツ」の特質について論じている。稲垣は、近代スポーツのエートスは「近代合理主義」にあるとし、「ニュースポーツ」はそれと逆のベクトルをもつとしている。既存の近代スポーツは競争原理、勤勉さ、重厚長大などの近代社会の諸特徴をそなえている。これにたいし、ニュースポーツは「後近代」（ポストモダン）をこのように呼ぶのであろうが、そ

の理由は不明)のものであり、近代スポーツのエートスを排除ないし否定し、軽薄短小をめざす文化のひとつであるとしている。

さきの野々宮は「ニュースポーツ」の出現を近代スポーツの連続線上においてとらえていたが、稲垣のこの議論は両者のあいだにはっきりと断絶があると主張しているところに特徴がある。稲垣によれば、「ニュースポーツ」は近代スポーツとは逆のベクトルをもち、進歩発展、勤勉さ、といった近代社会の価値観に向けようとするものであるとする。

稲垣の議論のもう一つの特徴は、「ニュースポーツ」と気功術、ヨーガ術、太極拳、瞑想、座禅、聖地巡礼、信仰登山などとの関係についてふれていることである。稲垣は、「『スポーツ』の概念をあとかぎり広義に解釈する立場」から、従来の上昇志向を当然のこととする近代スポーツにたいし「下降志向のスポーツ」があり得ると主張している。

つまり、「壮年期を過ぎて加齢とともに衰えていく肉体に調子を合わせるスポーツ」がありうるのであり、そこに気功やヨーガが位置づくところである。このようにスポーツの外延を拡大し、人間の心身の内面に向かっていくような文化をも「ニュースポーツ」としたのは、後述のヨーロッパ諸国での「東洋文化」への関心とあいまって興味ある指摘といえることができる。(ニュースポーツ研究会『ニュースポーツとは何か』1993.3)

報告者もまたそうしたスポーツの原理的な変化に注目し、1990年に入って「やわらかいスポーツ」という概念を創案してきた。つまり、従来の競技スポーツは、達成原理にもとづく目的志向型のスポーツであり、その目的、内容、方法において達成への合理性を追求する「硬いスポーツ」であるとし、19世紀後半から20世紀にかけての産業社会の行動原理がそこに投影されていると見る。これにたいし、20世紀末四半世紀に台頭してきた新たなスポーツは、快楽原理を強調した過程重視型のスポーツであり、その目的、内容、方法においてスポーツ技術とスポーツ場面での人

間関係それ自体を享受しようとするものであり、目的合理性にともなう行動規範の柔軟化を特徴とする「やわらかいスポーツ。」であるとしている。(雑誌『スポーツ批評7』1990.10)

さらに影山健らはいわゆる「トロプス」論と展開し、既存の競技スポーツの競争原理を資本主義のエートスとして否定的に評価し、勝利を追求するスポーツ種目、スポーツ大会を否定する。影山らは競技スポーツの代替文化として「協同ゲーム」を提唱し、人間関係の維持と再構築を展望している。そこには、科学批判、文明批判、エコロジーの潮流が未分化ではあるが見られる。山本徳郎は、「良心的スポーツ拒否」(「体育とスポーツの行方」、近藤編『スポーツの文化的探求』1981)において、制度化されたスポーツと体育が青少年の行動規範を枠付け、強制への追従をもたらし、ひいては障害あるいは生命の危機を引き起こしているとして批判する。そのような理由から、山本は体育科教育を否定的にとらえ、子どもの自発的な遊びを高く評価する。

伊賀野、広畑成志(「オリンピック・イデーと反オリンピック批判」、『スポーツの自由と現代、上』1986)、功力俊雄「スポーツにおける「中心と周辺」論の検討」(同上、下巻)らは、上述の稲垣論文を近代スポーツ否定論として批判し、民族的運動文化、神秘主義の再評価の提言を反動的として断罪する。しかし、この批判は、稲垣らの指摘する近代スポーツの「限界」について、商業主義と政治的濫用の排除、フェアプレー精神の普及などを対置するのみであり、近代スポーツの競争原理などの原理的、歴史的検討が不十分である。

2. 欧州の論調

フランスでは、記録やメダルを追求するスポーツは子どもの能力を「搾取」するものであるとして、早期から競技スポーツに子どもたちを没頭させることに批判が生まれている。これは、青少年の競技スポーツにおける勝利至上主義が大人の文化の押しつけであるという批判であり、フランス社会における運動文化の一面化への警告と考え

られる。こうした傾向を克服するさいの視点として論者らは「子ども向けのスポーツ」が必要であるとしている。(J. Personne, *Le sport pour l'enfant, ni records ni médailles*, Paris 1993.) また、大人についても、伝統的な競技スポーツ以外のオプションを考えるべきだという主張から、伝統的な競技スポーツから距離を置き、「新たなやり方でのスポーツ生活」が提唱されている。

(J.M. Legras, *Sport et société*, Paris 1993.)

ドイツでは「オルターナティブ運動文化」(K. Moegling, *Alternative Bewegungskultur, Vom Leistungssport zur Ökologie des Leibes*, Frankfurt a.M. 1988.)、「もう一つの運動文化」(S. Krner u.a., *Annäherungen an eine andere Bewegungskultur*, Pfaffenweiler 1993.)、「ニュースポーツ」(B. Elpel u.a., *Zur Zukunft gewerblicher Sportangebot*, Hamburg 1990)など、伝統的な競技スポーツにたいする批判論が見られる。

これらのドイツでの議論において特徴的なことは、これまで日本などが模範としてきたクラブ制度に転機が来ていることを指摘している点である。1980年代末までにドイツスポーツ連盟の会員は人口の3割を超えるまでに成長した。この数字は一面ではドイツのクラブスポーツの発展度を示しているが、上記の批判論は、いまだクラブスポーツにかかわりをもたない人々が7割近く「も」いる、という指摘をしている。クラブを敬遠する人々などのクラブ離れにはドイツスポーツ連盟も危機感をいだき、「クラブでスポーツをやろう」のキャンペーンを打ち出しているほどである。こうした市民の新たなスポーツ傾向を「地域オリンピック」、「ゲーム祭典」、「女性スポーツの振興」などにつなげていこうという主張が批判論の基調となっている。文明批判、フェミニズム、エコロジー、ヘゲモニー論などの観点から既存のスポーツ組織とそこでのスポーツの内容が人々の生活の変化に追いつかなくなっているという認識がそこにあるのである。

3. 「ニュースポーツ」論の論点整理

「ニュースポーツ」論には、近代スポーツが百数十年をかけて地球的規模で普及拡大をとげたのち、その「文化帝国主義」(A. Guttmann)によって確立してきた世界支配の構造が崩れつつあるという時代認識が基底にある。これは現象的には、新たな素材、用具、やり方などによってこれまでとちがった時空間支配を可能にするスポーツ種目が出現したり、土着的、民俗的遊戯が再評価されたりしているところにあらわれている。このような変動が生じ理由について、客観主義から主観主義へ、合理主義から非合理主義へ、人工から自然へ、男性文化から女性文化へ、未来志向から現在志向へ、普遍から特殊へ、といったパラダイム転換が指摘されている。

こうした歴史的過程におけるもっとも基本的な問題は、既存のスポーツ組織とそこでのスポーツのやり方が人々の生活の変化に追いつかなくなっているという状況である。その原因の一つは、これまでのスポーツが前提にしてきた年齢、性別、職業、階層の枠を超えて多くの人々がスポーツに参加してきたことにある。そうした人々のさまざまな期待に反し、近代スポーツは能力主義にかたよりすぎ、あまりにも近代産業の論理を反映したものになっているのではないか。

もう一つは、既存のスポーツ、とりわけ競技スポーツが遊戯領域からの離反しているという事実である。J. ホイジンガは『ホモ・ルーデンス』において、「スポーツ制度の発達を見ると、それは、競技がだんだん真面目なものとして受け取られる方向に向かっている」と指摘しているが、近代スポーツはますます遊戯領域から離れ、あたかも労働と同じようなものになっているようにも思われる。スポーツにおける競争原理、達成原理、目的合理性、物質至上主義などの弊害が批判されるゆえんである。(山本徳郎論文参照)

スポーツの組織や技術のあり方がもはや仕事のそれと区別できにくい状態にあるとすれば、解放感や自己実現、人間性の回復をスポーツにもとめようとする人々の期待とのあいだにズレが生じるのは当然であろう。そして、そのズレを埋めるた

めにスポーツのパラダイム転換が起こるとすれば、その方向は非合理主義や「霊界への接近」、反近代、反科学などではなく、なによりもまずスポーツにおける遊戯性の復権であるといえるのではない。

報告者が提起する「やわらかいスポーツ」は、遊戯性を忘却したスポーツにたいするオルターナティブであり、スポーツそのものを味わい、楽しみたいと考える人々の価値観、手段、組織、技術などの総体をさす、ということができる。

4. 文化変化/文化変容 としての「やわらかいスポーツ」

一つの文化体系が変動するには、それ相応の動因があるはずである。報告者はその動因はすでに統一組織・統一ルールによって特徴づけられる近代スポーツの発展普及過程にあったと考える。

A 水平的伝播過程 (cultural diffusion)

近代スポーツはその発展過程において、いわば水平的に伝播し、普及、発展してきた経過がある。その一つは地理的伝播である。スポーツ種目が組織され、一定の期間にあたかもアメイバーが成長するように、その生存圏を拡大してきたのであった。(J. Bale, Sports geography, London/New York, 1989. 参照) その過程において近代スポーツは土着文化(民俗的遊戯)と衝突し、あるいは拒否されるが、最終的には受容されていく。これはそれぞれの地域の住民の立場から見れば自主的な選択であっても、支配的文化への同化(cultural assimilation)という面も見逃せない。

近代スポーツの水平的伝播の第2は階層間伝播である。それはP.C. MacIntosh (Sport in society, London 1963) が指摘する貴族からブルジョアジー、労働者への「下降伝播」もあれば、その逆の「上昇伝播」もあったであろう。こうしたサブカルチャーの支配的カルチャー化にともなって、近代スポーツはマスカルチャーとなったのである。

さらに水平的伝播の第3のカテゴリーとして、社会領域間伝播をあげることができる。たとえば、

有閑階級の趣味、娯楽であったスポーツが教育の領域に採用されたり、軍事、政治、商業、医療などの手段として用いられしたりした経過がそれである。

こうした水平的伝播の諸過程において、近代スポーツは地球的な規模で普及をとげてきたが、その普遍性ゆえにそれまでの伝統的な文化を破壊し、あるいはその発展を阻んできた。とくにそれが特定の階層、階級によるヘゲモニーをとまなう場合、そこでの代替文化として「ニュースポーツ」が台頭する。

B. 垂直的進化過程

垂直的進化過程は、スポーツそれ自体の発展過程である。N. Elias の暴力論が指摘するように、近代スポーツはたえず「洗練」の過程をたどり、その暴力性を抑制する方向に発展してきた。それはA. Guttmann のいう「合理化」でもある。こうして近代スポーツは施設用具、ルール改正によって新たな支配時空間をつくりだしてきたのであった。しかし、その結果、とくに競技スポーツにおいていえることであるが、自然としての人間の身体の可能性の限界にまで人間を追い込んでいたのであった。いま、そうした限界状況を克服する新たな文化が現在もとめられているのである。

先述の階層間伝播とも重なり合うが、近代スポーツはその普及過程において、階級、地域、民族に分化した下位文化(sub-culture)に分化してきた。たとえば、ベースボールにおける甲子園野球大会、19世紀末ドイツにおける労働者文化としてのスポーツ組織の出現、あるいは中部ヨーロッパのチェコ、ポーランドにおける「ソコール」文化を形成してきた。そうした下位文化の成立要因は現在もあるわけであり、そこから現在の競技スポーツにたいする変化、変容の力がはたらくものと考えられる。

かつての労働者スポーツ運動は、支配的な文化にたいする対抗文化(counterculture)であったことはよく知られている。上記の影山らの「トロプス=競争より協働を」という主張も、現代社会において支配的な競技スポーツに抗して対抗文化を

生みだそうとする努力であるともいえる。ここから新たなスポーツ、あるいは運動文化が生まれるかどうかはまだ定かではない。

5. 「運動文化」概念

これまでのべたように、文化としてのスポーツの変化、変容を把握するためにさまざまな視点があるが、それらは現代の歴史的な現象として総合的、統一的にとらえられなければならない。層でないと、あれこれの解釈されるだけにおわり、全体としての構造が把握できないことになるからである。そうした意味では、「近代スポーツ」の発展過程を歴史的に追うだけでは現在起こりつつあることは明らかにならないように思われる。

いったいスポーツの何が変わりつつあるのか、形式なのか、内容なのか、またそのような変化は何をめざしての変化なのか、こうした疑問に答えるには概念の整理が必要になってくる。というのは、とくにわが国においては、「体育」と「スポーツ」との意味内容の差異が明確でなく、対象が規定されないまま議論だけが先行する場合が多いからである。極端な場合には「体育・スポーツ」などという折衷概念を用いることさえある。

報告者は、以前からこうした概念上の混乱を避けるため、上位概念としての「運動文化」を採用する必要を説いてきた。こうした上位概念の必要性は、これまで各国で意識されてきたところであり、歴史的にも「運動競技」、「身体訓練」、「身体文化」などの言葉が用いられてきた。厳密に言えば上位概念は、諸事象を包括して呼ぶときの総称とは違うが、しばしば混同されるので若干説明を加えておく。それぞれの時代のスポーツや体育にかかわる現象を総称するとき、そこでもっとも支配的な文化形式をもって総称するという傾向が見られる。たとえば、19世紀のドイツでは「トゥルネン」のほかにもボート、サッカーなどいくつかの近代スポーツ種目が併存していたが、それらを総称するときの一つの言葉として「トゥルネン」が用いられたことはよく知られている。また、第2次世界大戦までのわが国では、スポー

ツウェアを「体操着」、体育教師を「体操教師」、体育館を「雨天体操場」などと呼びならわしてきた。つまり、「体操」という言葉が総称となっていたのである。このように、それぞれの時代のもっとも支配的な文化形式が総称として用いられることが多かった。

ここで取り上げる上位概念は、そうした総称とは違い、歴史貫通的な考察にも耐えうるものでなければならない。つまり、人類史を通してわれわれの研究対象を追求するときにも適用できる概念が必要なのである。そのような概念として「運動文化」を採用したのは、たんなる思いつきではない。Bewegungskultur、movement culture といった表現が諸外国にも見られる。「運動文化」には近代スポーツ、武道、トゥルネン、体操などさまざまな様式があり、歴史的に、地域的にさらに多くのものがあつたことが知られている。こうした様式の点から見ると、最近競争をとまなわないゲームなど新たな変化があらわれているといえる。

「運動文化」の諸様式は、教育、遊戯、政治、商業、医療、軍事などさまざまな機能を果たすことが期待されている。わが国においてはかつて教育的機能が支配的であつたものが、商業や医療にも「運動文化」の様式が活用されるようになってきている。このような機能面において、「運動文化」はますます幅広いものが期待されてきている。

さらにそうした「運動文化」の機能は、学校、クラブ、会社、軍隊、病院、企業、行政などさまざまな組織、制度を通じて発揮されることになる。このような組織、制度ということでいえば、近代スポーツは最近企業との結びつきを増大させ、従来の学校との結びつきを凌駕しつつあると見られる。

報告者が提唱する「やわらかいスポーツ」というカテゴリーは、「運動文化」におけるこうした様式、機能、組織・制度の多様化傾向を特徴づけるために有用であると考えられる。現在課題となっているのは、その多様化傾向がどこをめざして進んでいるのか、その原動力はどこから来るのか、という点を解明することにある。